



**MEMBERS**  
Aya KUBOTA (prof.)  
Akinobu MASUMURA (M2)  
Misa LEE (M2)

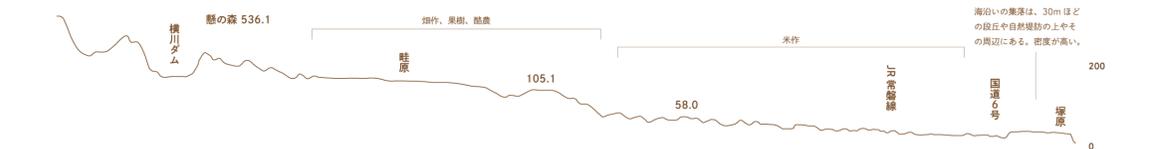
## 阿武隈高地の麓、紅梅の里 小高 AT THE BOTTOM OF ABUKUMA MOUNTAINS, ODAKA



小高は、福島県の浜通り、南相馬市に位置し、西に阿武隈高地がそびえ立ち、東に太平洋が広がる、自然と地形がゆたかに折り重なる町である。

ここ浜通りでは、毎年7月最終週の3日間に渡って、千年以上続く伝統神事である相馬野馬追が行われており、震災後も休まず決行されるほど人々に親しまれてきた。小高に位置する相馬小高神社は、野馬追最終日に野馬懸が執り行われる場として重要な役割を担っている。

しかしながら、小高は原発20km圏内にあるため、現在は避難指示解除準備区域に指定されており、予定では来年の4月の解除まで事業再開はできても居住することはできない。地震、津波、原発の複合災害は世界でもまれで、震災後4年が経った今も復興に向けて多くの人が奮闘する姿がある。

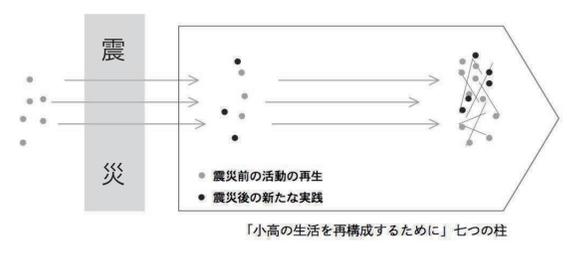


## 福島PJの軌跡 A HISTORY OF FUKUSHIMA PJ

日付	内容	作業等
5/15	南相馬市見学	活動再開事業所マップ まちなか聞き書き地図 小高年表作成 まちなか模型制作 15,000:1 広域模型制作 作成
7/10	浪江町見学	
7/27 - 28	野馬追見学 / まちなか・小高神社・海・アグリパーク等	
10/19	復活秋祭り / まちなか見学 / 出店者の方々へインタビュー	
11/4	いわきスタジオ現地見学に学生2名で同行 / NPO みんぶくの話 / 災害公営住宅等	
12/8	上浦・山澤・まちなかの住民の方々へインタビュー@小高区役所	
12/21	第1回小高区地域協議会 地域構想 WG	
1/15	文化財課・大富・塚原・耳谷・浦尻・大田和の方々へインタビュー@区役所	
1/31 - 2/1	朝日座見学 / 村上 / 大富でインタビュー	
2/13 - 14	第2回小高区地域協議会 地域構想 WG	
2/22	第3回小高区地域協議会 地域構想 WG	
3/16 - 17	国連防災世界会議 “福島復興と被災者の生活再建支援” にて窪田先生登壇	
3/22	第4回小高区地域協議会 地域構想 WG	
3/26	復興デザイン研究会にて活動報告・議論	



## 境地に立たされた小高で今 できること、地域構想づくりの駆け出し THE BEGINNING OF CULTIVATION FOR ODAKA



昨年度は、南相馬市小高区地域協議会の下部組織として地域構想ワーキンググループを立ち上げ、避難指示解除に向けて住民自身の手でできることを実践していくための指針となる地域構想づくりの議論を重ねた。一方で、小高出身の方々の中には、今できることから既に行動を起こしている人がたくさんいる。

以下に掲げる七本の柱は、上記のような人々の想いを実践し、その連携を助ける緩やかな「ネットワーク」として小高全体、さらに隣接する他区や浪江町も含む相双地域を支えるものとなるよう心がけたい。

### 多様な在から成る

小高は東西約10kmと細長く、高低差が500mほどあり、海辺から阿武隈高地の扇状地まで多様な集落がある。小高のまちなかや原町や浪江との繋がりの中で、それぞれの行政区に自治の仕組みと文化があった。

### これまでの蓄積を活かす

小高神社、相馬絹業会館などの建造物、酪農研究会などの自主組織、養蚕、機織の記憶が、過去の蓄積としてある。これらは小高らしさの要素であり、小高再発の原動力となる。

### まちなかが小高の主柱となる

小高のまちなかの関係の深さは、在によって違っていたが、在を支えていたのだから。復帰後、小高の中心としての役割がきっとあるだろう。

### 新たな生業に挑戦する

単一の産業で発展してきた町ではなかった。農業、漁業、絹業、流通、工業…。厳しい状況を乗り越える際には、新たな産業、乗り越えるための知恵があった。

### 活動が芽生える

各所で様々な活動が展開されている。人が集う場や情報を共有する場ができ、再開した店や事業所がある。漁業や酪農を再開しようと決意している人もいる。小高の将来像は、そうした活動の先にある。

### 人と小高の、いろいろな繋がりをもつ

戻り人がいる一方で、みんなが小高にすぐに帰れるわけではない。また、今までも外部の人との接点が増えている。戻り人、戻らないが関心がある人、外の人と、まちの係性を育みたい。未成年世代との丁寧な対話も必要。

### 災害・放射線リスクに向き合う

ゼロにはならないリスクと、どう向き合うべきだろうか。放射線汚染は未知なるリスクであるがために、世代によって対応も異なる。将来世代のためにも、向き合い方を模索しながら、度重なる災害を乗り越えてきた経験にまた一つ、知となるものを残したい。